

## 林有章と養嗣子の頼三郎

——「林氏墓所」を中心にして——

はじめに

横浜専門学校が一九三四年（昭和九）四月、返還を要しない給費生制度を開始した。

それを支えるために、学校当局は前年度から一八名の「顧問」を構成員として「奨学会」を発足させた。その歴史的経緯と意味の深さについて、二〇一九年三月に論考をものしたことがある。<sup>(1)</sup>

論考の、影の主人公のひとり、横浜専門学校初代学校長の林頼三郎（一八七八—一九五八）である。論考抜刷ができあがるや、墓前に捧げたかった。まずは頼三郎生誕地の旧忍藩城下を訪ね、その後、熊谷市の「熊谷寺」墓所を探すことになる。

JR高崎線熊谷駅の駅周辺案内図は、めざすところの墓地「熊谷寺大原墓地」はない。熊谷寺に向け歩く

内 海 孝

途中、旧中仙道でお見掛けした古老にお聞きする。老舗のそば屋、清気庵のご主人は「八木橋」の、その先で、あっちの方だよと右から左へ指さす。あっちといわれても、見当がつかない。八木橋というデパートがあるらしい。その信号を右折し、かなりの距離があるよ。いまから行くのかいといわれる。

四月二五日午後四時半、一時間ぐらいいはまだ明るい。行くしかない。大原墓地を知っている人に出会わない。信号でバイクの郵便配達員が停まった。配達区域外で知らない。だがスマホで所在を探してくれる。この道を真っ直ぐに、かなり行く。左手に「ワークマン」の看板がある。その先を左折しなさい。

指示どおりに歩いて行くと、お寺、葬儀場、石材店がみえてきた。お墓の形も目に入る。数区画にわたって墓地域がつづく。広すぎて途方にくれる。自動車

は、ライトをつけて通った。再度訪ねるしかない、諦めて帰る。

すると、灯りがともる野口石材店から店主が出てきた。あ、もしかすると、あそこかもしれないと案内してくれる。墓所に看板があった。いまはないと説明しつつも林家墓地にたどり着く。薄暗いなかで墓石文字を確かめ、論考抜刷を墓前に捧げることができた。

ところが林家墓地の一角に、大きな石碑が目にとまる。読むと、頼三郎の養父である林有章（一八五八―一九四五）が林家の家譜を縷々とつづって、頼三郎の「出世」を誇りにしている。

改めて、来訪して石碑を書写するしかない、石材店の店主にお礼を述べて帰宅した。

### 一 林氏墓所と関係墓碑

熊谷寺大原墓地の「大原」というのは、旧熊谷町の字名である。

熊谷は一八七三年（明治六）六月熊谷県庁が置かれ、庁舎は熊谷寺庫裡が充当された。県庁は七九年八月に廃止されたものの、官衙、学校、工場も建てられ、交通要路の改築、住宅地の拡張が展開された。宿



写真1 「林家墓所」の現況（筆者撮影、2019年8月）

正面にみえるのは墓石A、その左が「熊谷市指定史跡」の墓石B、門柱右の背後（画面右端）にあるのは墓石C「林氏累世碑」である。

場町であつた時代の「幽邃の墳墓地」は、人家に囲まれるにいたる。<sup>③</sup>

とくに商業地区で「最も痛切に移転の必要」に迫られたのは、圓照寺墓地である。一九一三年（大正一二）二月に、新墓地は郊外の字「大原」で、移転を終了した。それ以後は、付近の石上寺、熊谷寺、報恩寺、松岩寺も墓地の移転をよぎなくされた。

林家の菩提寺、真言宗熊谷寺は一九二一年（大正一〇）一月、新墓地敷地として他の寺院と同じく大原に決定した。翌年一二月、墓石三〇三二基の移転改葬をほぼ完了する。その新墓地移転委員長は林頼三郎の養父、林有章であつた。<sup>④</sup>

そのためであらう、林家の墓地のある区域は墓地区画が広い。隣接する左側に、熊谷宿本陣を継いだ竹井家の竹井澹如（一八四〇—一九一二）の墓地も同じ区画で並んでいた。現在、その間の小路であつたところに別な墓地が設けられて、かつての熊谷宿の由緒ある歴史的残映も消えつつある。

林家の墓地の前に立つと、三段の石段がある。

上がると、まず門柱がある。右手の石柱は表「林氏」で、裏面が「十一代主従六位林有章」で、左手の

表が「墓所」で、裏面が「大正十一年十一月修築」と縦に刻字されている。高い石門の背後は、灯籠が左右に二基「大正十五年七月 林氏」と刻まれている。

すなわち、この門柱「林氏墓所」は有章の妻、意素（いそ）が死去した大正十一年（一九二二）八月二九日から二ヶ月余に建てられたことがわかる。

墓所の正面にみえるのは墓石A「林家累代之墓」、その左が墓石B「櫻雲院芳譽文徳有章居士／翠雲院湛譽淑徳意素大姉」を含め歴代の六基余がある。正面左側は歴代の墓石が七基余、正面右側は石門の間に、自然石の墓石C「林氏累世碑」があり、墓石D「純忠院烈譽晃勲居士」を含め七基がある。

ところで「林氏墓所」にはかつて、たしかに「看板」があつた。それは自然災害で壊れ、取りはずされた。<sup>⑤</sup>看板の内容は以下のとおりである。<sup>⑥</sup>

#### 熊文指第一五九号

##### 指定書

林 有章 墓

右を熊谷市指定史跡  
に指定する

昭和五十六年十一月三日  
熊谷市教育委員会 印

これによると、熊谷市教育委員会は一九八一年（昭和五六）一月三日の文化の日に、頼三郎の養父である林有章が眠る墓石（墓石B）を「熊谷市指定史跡」に指定したことがわかる。

史跡指定の事由は「熊谷堤築堤、史跡保存会の設置、各種教育施設の開創と指導など、郷土事業に尽力された熊谷の先覚者の墓」である。

つまり、林有章という存在は熊谷市にとって「史跡」に「指定」するほど歴史上、学術的に価値が高く「熊谷の先覚者」であると位置づける。このとき、当初は林家と隣接墓地であった「竹井澹如墓」も「酒井天外墓」と同時に、熊谷市指定史跡の認定を受けた。

その意味で、林有章にかかわる墓石、墓碑、ひいては石碑を取りあげて解読することは養嗣子、頼三郎のありかたと背景を深く理解することに連動するといわねばならない。

本稿では「林氏墓所」のすべてを紹介する余裕はない。だが、ここでは、墓石A～Dについて紹介しつつ

解説をくわえてみたい。林氏累世の流れにしたがえば、まずは頼三郎の養父、林有章（BとC）を取りあげて、その後では頼三郎にかかわる墓石（AとD）をあつかってしかるべきであろう。

## 二 養父林有章と養母の墓石

——史跡の墓石Bをめぐる——

林氏墓所の正面にむかって、左手に熊谷市「史跡」の墓石Bがある。

その墓石Bに向きあうと、つぎのような文字が刻印されている。

櫻雲院芳譽文徳有章居士〔正面右〕  
翠雲院湛譽淑德意素大姉〔正面左〕

墓石の正面右は林頼三郎の養父、有章である。

院号のはじめ「櫻雲」が意味するのは、こうである。それは、熊谷県時代に暢發学校として使われた高城神社境内の「三層楼」が十五番講習学校、埼玉県立分病院、熊谷中学校、熊谷小学校と引きつがれ、最後に名勝の熊谷桜を維持保存する「保勝会」に無償で払

いさげされ、荒川の桜堤付近に移転改築した。観桜客の便宜にするためであった。そのさい、有章は乞われて「櫻雲閣」と名づけた。<sup>⑤</sup>有章の通称が櫻雲であったことに由来する。

院の下「芳譽文徳」は、有章が一八九三年（明治二六）八月を初発として撰文、書丹、揮毫を請われることが多く、その数が一九二五年八月には「百余碑」に達したほどで、<sup>⑥</sup>文才に長け、高い評価をえていたことがわかる。

後者の正面左は林頼三郎の養母、意素の院号である。妻が夫の有章に先立って死去しているので、妻の院号「翠雲院」に対応して「櫻雲院」と夫の特徴を引きだし冒頭で表現したと考えてよい。

墓石の右側は有章の事歴である。一行が二七文字、一一行にわたる長文の墓碑銘である。

從六位林有章字子慶號幽嶂初名勘兵衛父由右衛門  
母字良以安／

政六年三月朔生矣四歲喪父爲母及祖母所養育弱冠  
繼家長娶小／

沼氏專當公務與同志興郷校爲幹事栽櫻樹於熊谷堤

後年開名勝／

指定之端二十六歲拜大藏省御用掛與名流伍三十歲  
任葛飾郡長／

歷北埼玉郡長在官殆十年養賴三郎爲嗣以長女妻之  
又轉兄玉郡／

長無幾致仕歸里起保勝會爲會頭以顯揚郷土社寺史  
蹟名勝爲己／

任被史蹟保存會長文部大臣等表彰十數次焉爲人好  
學撰文揮毫／

百餘碑又有名勝熊谷櫻幽嶂閑話松筠集等之著昭和  
二十年二月／

十二日以病歿於自邸齡八十有七

辭世 物外之心老大身 悠然辭世乃前因

嗟吾未盡里仁道 但願兒孫德有隣 幽嶂

墓碑「有章」の要点を摘出し、当面、必要な範囲で  
註記と解説をくわえたい。

1 字が「子慶」号が「幽嶂」で、初名は「勘兵衛」

2 父「由右衛門」母が「字良」で、一八五九年  
（安政六）三月朔日生れ

開港数か月前の、激動の新しい時代に生をうけ

たことがわかる。

3 四歳で父を失い、母と祖母に養われ「家長」を継ぐ

母は有章を生んでから三年間「病床」にあり、父は数えの四歳で亡くなった。その後、母は「寡婦」として暮らしたので、有章は兄弟も姉妹もない「ほんとうの一人ぼっちの相続人」であった。<sup>10</sup>

4 小沼氏を娶り「公務」に当り、同志とともに「郷校」を興し幹事となる

5 熊谷堤に「櫻樹」を栽え、のちに「名勝」の指定を受ける端を開く

6 二六歳で大蔵省の御用掛を拝し「名流」と伍す  
7 三〇歳で埼玉県葛飾郡長に任じられ、北埼玉郡長を歴任し在官は一〇年

8 頼三郎を養子にし「嗣」となし長女を妻とする

有章は、子供がぜんぶ女子である。将来はすでに成業した者を養子にするか、少年を引きとって「自分の理想通りに養成し、より好き後継者を作るか」が問題としてあった。北埼玉郡長を勤める役所の給仕に採用して郡傭に昇格し

た一四歳の頼三郎に白羽の矢をたてた。<sup>11</sup>当初の養子先は正確には、一八九三年（明治二六）九月、有章の遠縁にあたる「林ひさ」方で、のちに長女の婿にするときのことを考慮したと考えられている。<sup>12</sup>頼三郎が三輪姓から林姓になった瞬間である。

9 兄玉郡長に転じてまもなく帰郷する

10 保勝會を起して会頭となり、郷土の杜寺、史蹟、名勝を揚げ史蹟保存会長に任せられ文部大臣等の表彰を受けること一〇数回

11 ひととなりは学問を好み、撰文、揮毫は「百餘碑」で『名勝熊谷櫻』（一九二八年）『幽嶂閑話』（一九三五年）『松筠集』（一九三八年）などの著作がある

12 一九四五年（昭和二〇）二月一二日、自邸で病歿、齢八七

熊谷市大字熊谷三五二六番地の自邸の脇に、愛宕神社の大鳥居があった。自邸を含め、市街地も有章の病歿半年後、敗戦前日の四五年八月一四日未明からの熊谷大空襲で焼失した。

この墓碑では、年齢は当時の習慣で数え歳である。だが林有章の全生涯について、その概略は書きつくされている。さらなる詳細な事歴は次章で検討することにした。

墓石Bの左側面は有章の妻、意素の事歴である。

大姉名磯子下野國足利町名主小沼政兵衛五女  
母曰喜代以萬延元庚申年八月九日生齡十八爲  
林有章之室舉五女長女貞子在家二女文子嫁于  
三田氏三女道子于三輪氏四女俊子于中村氏五  
女八重子別分家資性温和貞實善事大姑及姑氏  
鞠育女子調理内政偶罹中風症經十餘年再發遂  
以大正十一壬戌年八月二十九日歿享年六十三

一行二〇文字、七行分の要点を掲出する。

# 1 名は「磯子」

正面の戒名では「意素」である。「磯子」は通称であったのであろうか。有章の著作中では「いそ子」とも記す。<sup>(13)</sup>

2 下野国（栃木県）足利町名主、小沼政兵衛の五女、母は喜代、一八六〇年（万延元）八月九日

生れ

3 一八歳で有章の妻となり、五人の女を挙げる。長女の貞子は家にある。二女の文子が三田氏、三女の道子が三輪氏、四女の俊子が中村氏に嫁ぎ、五女の八重子は分家を別に立てる

4 生まれつき温和、まっすぐな性分、大姑（満壽）および姑（宇良）に善く仕え、女子を大切に育て家政をうまく切り盛りした

5 中風症にかかり一〇余年をえて再発、一九二二年（大正一一）年八月二十九日歿、享年六十三

意素は数えの一八歳で、一九歳の有章と結婚したことになる。結婚の年次を推計すると、一八七七年（明治一〇）ころである。長女の貞子が一九五四年（昭和二九）、七六歳で死去したので、生年は一八七八年と推断でき、両親の結婚時期に辻褄があう。

三女の道子の嫁ぎ先は頼三郎の生家で三輪氏、五女の八重子が分家を創立して「平田氏」を迎えたことは墓石C「林氏累世碑」でも判明する。<sup>(14)</sup>

墓石Bの裏面は「大正十三年八月哀子法學博士林頼三郎建之」である。



これによると、墓石は一九二四年（大正一三）八月、有章の妻「意素」が死去し満二年後の「三回忌」にあわせ、養母を亡くし養父は存命している養嗣子の法学博士、頼三郎が建立したことがわかる。

頼三郎が法学博士の学位を受けたのは一九二〇年（大正九）九月四日のことで、法務省大審院検事時代のことである。<sup>15</sup> 養母が死去したとき、法務省刑事局長であった。

墓石建立は頼三郎の名義である。だが墓碑「意素」への撰文は夫、有章によったにちがいない。では、墓碑「有章」の撰文はどのようなものであろうか。有章の用意周到な性格からして、最後の「病歿」時点の撰文と「辞世」を刻印する以外は、有章みずからが事前に用意していたとも思われる。

### 三 林有章の「林氏累世碑」と「一門の光栄」

——墓石Cをめぐる——

墓石Cは、類別的には石碑が正しい。

だが、論述上「墓石C」と形容する。赤みがかった自然石に刻印された「林氏累世碑」は林氏墓所の正面にむかって、右側の一番手前にある。

石碑上部の篆額は右ヨコ書きで「林氏累世碑」とある。その下に、石碑の文面は右からタテ書き一行四二文字、全二二行分がある。

採録引用にあたって、改行部分は斜線（／）でおこなうのが通例である。だが、本稿では便宜上、改行部の先頭に「／2」のように順番の数値をおくことにする。最後の二二行目は、年月日と撰者氏名が同列である。引用では撰者を一行ずらした。

林氏累世碑（右ヨコ書き）

- 1 我祖出於清和源氏後胤林勘解由源忠保公諸家圓系圖所載忠保筑後守蓋是也其孫林圖書政良林采／
- 2 女正員兄弟相與天正中歸住於熊谷正員別家其邸相對上町延及圓照寺稱林町政良君以弘治三年生／
- 3 經爭亂世正保二年十月廿二日壽八十九而逝葬熊谷寺其男襲二世曰勘兵衛貞英而政良女嫁別家正／
- 4 員男善右衛門貞英男曰由右衛門弘章爲三世其室別家善右衛門女也其女又嫁別家傳右衛門無子絶／
- 5 血縁三丁免村名主兼杉藤助弟某繼其家稱善右衛門弘章男四世曰仁左衛門友恒其室町役人布施田／
- 6 勘右衛門女男天無嗣家運衰頽至友恒世世爲町役人



其異母弟曰勘兵衛安定娶町役人閑野長左衛門／

7 女別居於大横町勤支配役繼五世鬻宇治茶及絹紬爲中仙道中之巨商世稱茶勘兵衛增殖家產崇奉神／

8 佛救恤窮困新設用水堰今尚有勘兵衛堰之稱安定男六世曰由右衛門忠鄰其室鎌杉村大行院秀譽法／

9 印女有一男一女男張辰繼世女里起子嫁皿尾村割役竹内作左衛門直道保壽九十一忠鄰端坐合掌念／

10 佛而瞑七世曰由右衛門即張辰也天資好學能詩文其室峰子亦巧和歌大原宿椎名半治郎寬賢女長子／

11 天次女曰周助有儀娶長谷川與右衛門女世起子爲八世雖能狂歌不事生產遂退其身三子曰由右衛門／

12 有則繼九世其室滿壽子越生宿本陣名主田嶋又作武鄉次女母大野氏仕田安侯大納言勤御使番又仕／

13 安藤伊勢守爲御次年三十嫁有則舉一男三女男早世年四十四失夫寡居擁三女子勤支配役義弟要三／

14 郎有孝起所謂家督相續之爭涉數年遂敗訴移住江戸先是以女子失婚期嫁次女信子于田邊氏長女高／

15 子讓家於三女宇良子適于嶋野氏共無子滿壽子百方苦心迎騎西町場割元名主新井善兵衛員長次子／

16 長吉配三女宇良子稱由右衛門有長繼十世舉男有章後有故大歸而病卒滿壽子與宇良子相俱守孤園／

17 專心鞠育有章有章年十三稱勘兵衛繼十一世後以有

章爲通稱娶元足利名主小沼政兵衛女意素子舉／

18 五女子有章參畫町政出仕大藏省滿壽子安意以壽八十七而終有章時在郡長職養元忍藩士三輪禮三／

19 男賴三郎爲嗣以長女貞子配之嫁次女文子于三田氏三女道子于三輪氏四女俊子于中村氏五女八重／

20 子分家迎平田氏宇良子意素子既逝矣賴三郎拜司法官爲從三位勲二等法學博士累進現在檢事總長／

21 之要職焉祖先以降血統連綿而至今日洵祖先之餘慶也乃敘累世之梗概以告子孫云爾

22 昭和七年十月二十二日

十一世從六位林有章撰並書

石碑「林氏累世碑」の要点はつぎに摘出し、適宜、註記と解説をくわえたい。石碑後半の部分、一一行目以降は主題に直結する。刻印された撰文は墓石Bと重複する部分もあるが、あえて省略しない。旧字を新字に直して解説する。

1 冒頭から三行目——わが祖は清和源氏の後胤、林勘解由源忠保、諸系図によれば忠保は筑後守で、その孫の林圖書政良と林采女正員の兄弟はともに「天正

中」(二五七三、九二年)、熊谷に帰住した。正員は別家し相對して、上町から圓照寺まで及び「林町」と称した。政良は一五五七年(弘治三)生れ、一六四五年(正保二)一〇月二二日に八九歳で没し、熊谷寺に埋葬された。息子が二世を襲い、勘兵衛貞英という。

2 四行目から六行目——三世が由右衛門弘章、四世は仁左衛門友恒で町役人を勤めたが家運は衰頹した。

3 六行目から八行目——五世が勘兵衛安定、大横町〔鎌倉町〕の支配役を勤め、宇治茶および絹紬を商売として中仙道中の「巨商」となつて「茶勘兵衛」といわれた。家産を増殖して神仏を崇奉した。困窮者を救恤し、用水堰を新設して「勘兵衛堰」の称がある。

4 八行目から一一行目——安定の息子は六世、由右衛門忠鄰定男、その息子が七世、由右衛門張辰で天資として好學、詩文を良くした。妻の峰子も和歌に巧みで、その次女の娘が世起子で八世を継ぐが狂歌をよくして生業にたずさわらなかつた。

5 一一行目から一六行目——息子が由右衛門有則〔有章の祖父〕で、九世を継ぎ、妻は満壽子〔有章の祖

母〕で、越生宿本陣名主の田嶋又作武郷の次女、御三家の田安家の「御使番」、安藤伊勢守の御奥にも仕え三〇歳のとき、三二歳の有則と一八二八年(文政一一)二月一九日に結婚<sup>16</sup>し、一男三女をもうけ、男は早世し、四四歳で夫を失つた。三女子を擁し〔女戸主で〕大横町の支配役を勤めた。だが〔亡夫の実弟の〕義弟、要三郎との「家督相續」の争いが数年にわたつた。長女は婚期を失い、三女の宇良子〔有章の母〕に騎西町場割元名主の新井善兵衛貞長の次男、長吉を婿にとり、由右衛門有長と称し、十世を継ぎ、有章を挙げ病没した。

6 一六行目から一八行目——満壽子と宇良子はともに「孤閨」を守り、専心して、有章を鞠育し、有章が一三歳のとき勘兵衛と称し、一一世を継ぎ、のちに有章を通称とする。元足利名主の小沼政兵衛の娘、意素子を娶り、五女を挙げる。

ただし、一七行目の文言「有章年十三稱勘兵衛繼十一世後以有章爲通稱」についての詳細は、次章で検討する。

7 一八行目から二〇行目——有章は町政に参画して、大藏省に出仕、〔祖母の〕満壽子は安心して八七歳

で没した。有章は〔北埼玉〕郡長の在任中、元忍藩士三輪禮三の〔四男〕頼三郎を養子にして嗣となし長女の貞子を嫁とした。次女の文子は三田氏〔医師〕、三女の道子は三輪氏〔頼三郎の兄の智〕、四女の俊子は中村氏〔写真師〕に嫁にやり、五女の八重子が分家して平田氏を迎え、〔母の〕宇良子と〔妻の〕意素子はすでに死んでしまった。

8二〇行目から二二行目——頼三郎は司法官を拝し、従三位勲二等、法学博士になって現在は検事総長の要職に累進した。祖先以降、血統は連綿として今日に至って、洵に祖先のおかげ（余慶）である。ここで累世の梗概を叙して子孫に告げるのみ。

9二一行目——一九三二年（昭和七）一〇月二二日、林氏一世で、従六位林有章が撰文と書を認めた、と結ぶ。

頼三郎が検事総長になったのは一九三二年（昭和七）五月二八日で、この撰文日付はその半年後のことである。それには理由があると考えてよい。

二四年（大正一三）一月九日、清浦圭吾内閣の司法大臣鈴木喜三郎のもとで、頼三郎は司法次官に昇進

し、五人の司法大臣に仕え、二七年四月二〇日の田中義一内閣が成立するや、次官をただちに免官された。江木翼司法大臣（憲政会）に「忠義をした」ともみられて、行く場所がなかった。それは、当時の新聞報道で「大変な左遷ですね」といわれた。<sup>17</sup>

だが、その人事案件について、頼三郎は養父の有章に相談した。

すなわち、上司で二四年以来の検事総長、小山松吉は内々に「次官から次席検事に転ずるのは余り名譽でもないが、この際司法部を去る意思がないならば、しばらく次席で隠忍して捲土重来、司法部の為に努力してはどうか」と頼三郎に話す。

すると、頼三郎からは「考へさせてくれ」と返事をして、熊谷の養父を訪ね相談したうえで、格下げの大審院検事に転官した。

三三年（昭和七）五月、検事総長の小山松吉が斎藤實内閣の司法大臣で入閣することになったときにも、小山は頼三郎に後任の検事総長になってくれないかと相談した。

頼三郎はこの昇任人事のときにも「自分としては総長の要職につくのは光栄ではあるが、今即答致出来



写真2 林氏墓所への墓参

(『中央大学学報』21-4、中央大学大学史資料課所蔵)

林頼三郎が廣田弘毅内閣の法相に就いた一ヶ月直後の1936年4月13日、熊谷市公会堂で「大臣就任祝賀会」があったとき「林氏墓所」にも墓参して、就任報告をしたのであろう。写真左は頼三郎、その背後は晃彦、中央の和服姿は有章、写真右上にみえる石碑が「林氏累世碑」である。

ぬ、考へさせてくれ」と小山に話し、熊谷の養父に相談して承諾した。<sup>(19)</sup>

このように、頼三郎は「普通の人ならば直に承諾する栄進の場合でも養父の同意が無ければ承諾しなかった」と、上司の小山松吉が語る。

いいかえれば、墓石C「林氏累世碑」を建立した事由は明確である。それは養父の有章にとって、養嗣子の頼三郎が「左遷」という苦境を克服して「捲土重来」をはたしたことを率直に慶ぶ。

司法畑の文官として検事総長→大審院長→司法大臣という栄進の流れのなかで、まず検事総長の「親任の<sup>(20)</sup>大命」を拝受したことは、祖先のおかげであると同時に林氏の誇りで、子孫に伝えるべき慶事を表現したといえる。

それは頼三郎が三五年（昭和一〇）五月、大審院長に「親任」し、同年八月に勲一等に昇叙せられたことについて「一門の光栄」であるとし、有章が心底からの慶びを隠さなかったことに繋がっているといわねばならない。

#### 四 林有章とその履歴

——大蔵省から埼玉県郡長に転出——

では、養父の林有章が墓石C「林氏累世碑」を建立したのは、その他の理由もあったのであろうか。

それを説明するためには、養父有章の履歴と官歴をみる必要がある。以下の資料「元郡吏履歴」(表1)は、埼玉県立文書館の所蔵文書である。<sup>(22)</sup>

引用するにあたって各項目の、左の番号は引用者が便宜上、付けた。

原資料「年號干支月日」欄は、原文の項目43番以後は「干支」がなく、引用では省略し、漢数字は洋数字、年月は点に置きかえた。

しかも、項目43以降の字体も変化がみられ、とくに朱書き(\*印)も三箇所があって、事務官が追加の項目を書き入れたと思われる。

地名の幡羅(はたら)を「旗羅」(項目18と23)と誤記した以外は、誤字はない。

だが、前後の文脈上、引用者が用語を統一して、補記し、欠落文字を「」で補った場合がある。それ以外はそのままとした。

有章履歴は、文頭の四行ではじまる。

埼玉県北葛飾中葛飾郡長 林 有章印

現住地埼玉県北葛飾郡杉戸町大字杉戸四番地

埼玉県平民舊名勘兵衛

安政五戊午年三月一日武蔵国大里郡熊谷町ニ於テ生

つまり、この履歴は有章が一八八九年(明治二二

二月一二日、埼玉県北葛飾中葛飾郡長に就任したとき、埼玉県庁に提出した書類と思われる。現住所は生地の熊谷でなく、任地先の北葛飾郡杉戸町大字杉戸四番地である。

記載生年「安政五戊午年」は、第二章で論じた墓石Bの「安政六年」とは一年の齟齬を来す。有章の自著「回顧七十七年」で、みずからの生誕日を「安政六己未年三月朔日」と記す。<sup>(23)</sup>

この「安政五年三月」という記載は、埼玉県郡区長試験の受験資料でも同じである。郡区長試験の受験資格が「満三十年以上ノ者」であったので、<sup>(24)</sup>それにあわせて生年を一年前倒したとも考えられる。<sup>(25)</sup>

さて、履歴は埼玉県の郡長就任の前後にわたって、

郡長歴任の一九〇三年（明治三六）の「休職満期」までの官歴が継続して記載された一次資料である。

四行の文頭書きにつづき、表1として作成した「年號」以下の一覧項目がある。

表1の73にわたる項目を俯瞰すると、三つの時期に大別できる。と同時に、有章「回顧七十七年」をあわせて検討すると、履歴項目中に記載されていない事項にも気づく。そこで、それぞれの時期の特徴に補記をくわえつつ特記事項を書きとめておきたい。

第一期（1～24）熊谷在住公職時代（明治七年一月～一八七四）

まず項目1～4では、一〇歳半ばを過ぎると、明治七年（一八七四）一月、熊谷駅＝町の惣代人に推薦され、九年（一八七六）三月には「副戸長」を命じられ、行政事務に参与したことがわかる。

このころ、有章は東京で発行する日刊新聞に投書して寄書欄に連載されるのが「何よりの楽しみ」にしていた時代であった。

東京日日新聞に「民会起さざるべからず」の投書が連載されたことから判断すると、この時期に湧きおこった自由民権運動の影響を若き有章も受けていたと

いえよう。

だが、明治八年（一八七五）の「変則町会」ともいふべき町の協議会をもってして町会を起こし、一二年に正式の町会ができたとき、有章は町会議員に推薦されて「最初の町会議長」を勤めたことがあったものの、履歴には記載がない。

それは、郡区長試験の狙いが「學術」に偏せず「実務」を旨として、その地域の状況、民情、利害に「通曉」する者を選任すべき必要があると閣令第二〇号で指定していたことを勘案すると、有章はその行政実務面での履歴を中心に書きこんだともいえる。

つぎには前章で検討課題とした有章「改名」時期について、履歴項目22は「明治一四年二月二七日」とする。

有章「回顧七十七年」によると、幼名は「勘之助」で、戸主になる時期、五代目の「勘兵衛堰」の称もあった勘兵衛にあやかるべく勘兵衛を戸籍上の名義にした。時期は「明治一六年官の允許」で、通称を有章（ありあきら）とした。<sup>(26)</sup>すなわち、通称改名の時期については、生誕年の一年ちがいではなく、二年の齟齬がある。

表 1 林有章履歴

年號月日	任免	賞罰	事故	官衙
第一期 熊谷在住公職時代				
1 明治7.11.	熊谷駄惣代人申付候事			熊谷縣
2 明治7.11.	熊谷小學校へ金拾圓寄附致候段奇特二付 爲其賞譽木杯壹個下賜候事			熊谷縣
3 明治9.3.14	其駅内地租改正事務擔当可相心得事			熊谷縣
4 明治9.3.29	副戸長申付候事			熊谷縣
5 明治9.3.	副戸長拝命二付熊谷縣惣代人解任			
6 明治10.2.	地租改正事務擔当辞職			
7 明治11.3.14	依願副戸長差免候事			埼玉縣
8 明治12.5.3	熊谷講習學校財務主管申付候事			埼玉縣
9 明治12.5.3	年俸金三拾圓相渡候事			埼玉県
10 明治12.9.18	縣立分病院會計及事務兼熊谷講習學校財務 主管申付候事			埼玉縣
11 明治12.9.18	月給金拾貳圓相渡候事			埼玉縣
12 明治12.12.	廢校二付熊谷講習學校財務主管解任			
13 明治13.2.5	月給金拾五圓相渡候事			埼玉縣
14 明治13.4.29	縣立分病院監事心得申付候事			埼玉縣
15 明治13.4.29	月給金拾八圓相渡候事			埼玉縣
16 明治13.7.19	縣立分病院設置以來職務勉勵二付爲其賞金 拾圓被下候事			埼玉縣
17 明治13.10.18	大里郡熊谷學校部内學務委員認可候事			埼玉縣
18 明治13.11.12	大里幡羅榛沢男衾郡部内ヨリ比企横見郡部内 ニ跨カル公立中學聯合會議員ノ當撰狀ヲ受ク			埼玉縣 大里幡羅榛沢 男衾郡役所
19 明治13.12.25	縣立分病院監事申付候事			埼玉縣
20 明治13.12.25	月給金貳拾圓相渡候事			埼玉縣
21 明治14.7.1	今般縣立分病院廢止候處同院開設以來職務 勉勵二付爲其賞金拾五圓被下候事			埼玉縣
22 明治14.12.27	舊名勘兵衛ヲ有章ト願濟改名			
23 明治15.5.19	公立中學聯合會議員辭職願ノ趣聞届ク			埼玉縣 大里幡羅榛沢 男衾郡役所
24 明治15.5.25	大里郡第一區學務委員依願差免ス			埼玉縣



## 第二期 大蔵省時代

25	明治17.3.4	準判任御用掛申付月給金三拾円下賜候事 但調査局勤務	大蔵省 調査局
26	明治17.5.9	第六部勤務申付候事	調査局
27	明治17.6.24	國庫金収入規則取調委員申付候事	調査局
28	明治18.3.17	事務勉勵ニ付爲慰勞金六圓下賜候事	大蔵省
29	明治19.1.18	任五等属	大蔵省権少書記官 正七位谷謹一郎奉
30	明治19.1.18	地方財務課勤務申付候事	主計局
31	明治19.3.4	事務勉勵ニ付爲慰勞金六圓下賜候事	大蔵省
32	明治19.3.10	任大蔵属	大蔵大臣秘書官 正六位平山成信奉
33	明治19.3.11	従来在職ノ判任官ハ一同大蔵属ト心得俸給 従前ノ通タル旨各局課ヘ達セラル	大蔵省
34	明治19.5.6	敍判任官五等	大蔵省
35	明治21.7.28	御用有之神奈川縣ヘ出張ヲ命ス	大蔵省
36	明治21.10.29	本年九月廿五日ヨリ施行セル郡區長試験ニ於テ 當撰者ト定ムル旨官報ヲ以テ廣告セラル	郡區長試験委員長
37	明治21.12.25	事務勉勵ニ付爲慰勞金八円下賜	大蔵省
38	明治22.3.19	御用有之神奈川縣ヘ出張ヲ命ス	大蔵省
39	明治22.7.22	官有財産物品會計課兼務申付	主計局

## 第三期 埼玉県郡長時代

40	明治22.12.12	任埼玉縣北葛飾中葛飾郡長	内閣総理大臣従一位 大勲位公爵三條実美宣
41	明治22.12.12	敍奏任官五等賜下級俸	内閣総理大臣従一位 大勲位公爵三條実美宣
42	明治23.1.23	埼玉縣第三區衆議院議員撰挙長ヲ命ス	埼玉縣
43	明治23.8.12	檢疫委員ヲ命ス	埼玉縣
44	明治23.12.27	任埼玉縣北埼玉郡長	内務省
45	明治23.12.27	敍奏任官五等	内務省
46	明治24.3.9	埼玉縣第四區衆議院議員撰挙長ヲ命ス	埼玉縣
47	明治24.11.16	勅令第二百十五号官職等級表制定ニ依リ 奏任九等*	
48	明治24.12.22	敍正八位	宮内省
49	明治25.11.20	勅令第九十六号官等俸給令ニ依リ高等官八等*	
50	明治26.12.13	陞敍高等官七等	内閣
51	明治27.2.27	明治二十七年三月衆議院議員選挙監督ノ爲メ	

		第四選挙区内投票所へ臨場ヲ命ス	埼玉縣
52	明治27.2.28	敍従七位	宮内省
53	明治27.8.28	明治二十七年九月衆議院議員選挙監督ノ爲メ 第四選挙区内投票所へ臨場ヲ命ス	埼玉縣
54	明治29.1.7	陸敍高等官六等	内閣
55	明治29.2.20	敍正七位	宮内省
56	明治29.3.31	明治廿七八年事件ノ功ニ依リ金百貳拾圓ヲ賜フ	賞勲局
57	明治30.3.31	陸軍召集諸費出納官吏ヲ命ス	埼玉縣
58	明治30.8.9	北埼玉郡検疫委員事務所長ヲ命ス	埼玉縣
59	明治30.12.25	本年赤痢病流行ニ際シ豫防救治ニ従事候ニ付 爲手當金拾圓給與	埼玉縣
60	明治31.3.5	第四區衆議院議員撰挙監督ヲ命ス	埼玉縣
61	明治31.7.6	北埼玉郡検疫委員事務所長ヲ命ス	埼玉縣
62	明治31.7.30	第四區衆議院議員撰挙監督ヲ命ス	埼玉縣
63	明治31.12.24	本年赤痢病流行ニ際シ豫防救治ニ従事候ニ付 爲手當金貳拾圓給與	埼玉縣
64	明治32.4.8	任埼玉縣児玉郡長	内務省
65	明治32.4.8	敍高等官六等	内務省
66	明治32.4.9	第五〔區〕衆議院議員撰挙長ヲ命ス	埼玉縣
67	明治32.4.9	陸軍召集諸費出納官吏ヲ命ス	埼玉縣
68	明治32.7.18	検疫委員事務所長ヲ命ス	埼玉縣
69	明治32.12.27	本年赤痢病流行ニ際シ予防救治ニ従事候ニ付 爲手當金拾五圓給与	埼玉縣
70	明治33.4.1	勅令第九十三号ニ依リ五級俸相当（六百円）＊	
71	明治33.8.18	文官分限令第十一條第一項第四号ニ依リ休職ヲ 命ス	埼玉縣
72	明治36.8.17	休職満期	埼玉縣
73	明治36.10.30	敍従六位 特旨	宮内省

備考 「元郡史履歴」（埼玉県立文書館所蔵行政文書、明1935－31）による。

＊印は朱書き、文書中「同」「同上」とある場合、省略しないで記した。40の「三條実美」は原文のままである。

第二期（25～39）大蔵省時代（明治一七年三月～一八八四）

通称を有章に改名したところ、有志者が埼玉県会議員に出よとか、在京中の友人が是非とも一度は「中央政府に奉職」するよう慫慂された。有章は後者を「希望」した。<sup>30</sup>

釜山の総領事、前田献吉が大蔵省調査局長の渡邊國武を紹介してくれた。渡邊の推輓で項目25の大蔵省「準判任御用掛」を拝命して、月給三〇円にて、調査局に勤務することになった。明治一七年（一八八四）三月四日のことである。

この大蔵省勤務時代が有章の人生にとって、最大の収穫期にあたり転機となった。

ひとつはのちに親友となる、大学出身の高橋捨六をはじめ、阪谷芳郎、大島邦太郎らと同僚になったことである。明治二六年（一八九三）九月、有章は養嗣子の林頼三郎を高橋捨六の法律事務所に遣わし住みこませ、東京法学院に入学せしめたからである。<sup>31</sup>

ふたつは人生の「出世の機会」を学んだことである。渡邊國武は大蔵次官のとき、某県知事から「適当な人物」を斡旋してくれと依頼された。有章が「適

任」と思うので行ってみてはどうか。二年後に大蔵参事官として帰京のできるように取り計らうといわれたが、有章は種々の事情からやむを得ず辞退した。

それは、有章にとって「官吏として好機会」を失った貴重な実体験であった。<sup>32</sup>この実体験こそが、のちに養嗣子の頼三郎が司法省での進退出処を決するとき、必ず有章への「相談伺い」に顕現し、胚胎しているとみてよい。

三つめは「郡長試験」の機会をえたことである。ちょうど数えて「三十に達した」明治二一年、第一回の郡区長試験がおこなわれることになった。有章は「都合上埼玉県の郡長たらんこと」と志願した。<sup>33</sup>

この「都合上」とは埼玉県が郷里で、郡長は県知事のもとで町村を監督する立場で、それが藩閥や学歴でなく、新たに郡区長試験という実力で採用され、郷里の仕事に携わることの魅力を感じたと思われる。有章の官歴にとって、埼玉県の郡長在任時代は最も長い期間を記録することになるからである。

第三期（40～73）埼玉県郡長時代（明治二二年一二月～一八八九／明治三六年）

埼玉県の郡区長試験は明治二一年（一八八八）九月

二五日、県庁で施行した。<sup>(34)</sup>

志願者は残存する資料では、有章を含めて一八名、うち不参が二名、試験中退場が一名であった。有章の受験番号は「二十五」で、本籍が「埼玉県武蔵国大里郡熊谷宿三百三十三番地」生年月が「安政五年三月」と記載がある。

埼玉県の需要人員は二名であった。

試験の当選者は、一ヵ月後の一〇月二十九日に発表された。<sup>(35)</sup>

全国で二七名、埼玉県では需要人員の二名が名を連ねた。大蔵属の林有章、北埼玉郡書記の阪本與惣次郎（深谷宿七十四番地、嘉永三年（一八五〇）七月生まれ）である。

前任の川島浩が非職を命じられたのに代わって、有章は項目40のように翌年の明治二二年（一八八九）二月一二日、埼玉縣北葛飾中葛飾郡長に任じられた。<sup>(36)</sup>

県知事は吉田清英であった。郡役所がある杉戸町に到着したのは翌年一月末で、在京六年で埼玉に戻る。最寄駅は日本鉄道第二区線、現在の宇都宮線久喜駅であった。

一年後の明治二三年一二月二七日、埼玉縣北埼玉郡

長に任じられた。阪本與惣次郎郡長の後任である。有章亡き父の出生地で、郡役所は忍町にあった。

だが、有章は同郡が県内でも「最も難治」とされ、歴代の郡長在職期間は平均一年半にすぎなかった。で、当初、内務大臣秘書官であった小松原英次郎知事にその任に「堪へざる」と一書を認める。知事からはそれでも「御奮励御尽力」を願うと返書が来て、翌年一月、転任した。<sup>(37)</sup>

有章は転任以来、項目64にあるように明治三二年（一八九九）四月八日、児玉郡長に任じられるまで、八年四ヵ月もの期間にわたって、北埼玉郡長に在職していたのである。

そのなかで林氏にとって、最も記憶されるべきできごとが起こった。北埼玉郡長時代に、のちに養嗣子となる三輪頼三郎が郡役所に現れたのである。

忍高等小学校の大熊直橋は卒業年次の生徒で、家が貧しかった頼三郎から小学校を辞めて勤め口の相談を受ける。一ヶ月もたたないうちに、大熊は林有章郡長からの給仕採用を頼三郎に伝えた。明治二四年（一八九一）正月、有章のもとで働きはじめる。<sup>(38)</sup>

その働きぶりと性質をみて、有章は自分がはたせな

かった少年時代の「法律学を修得する目的」を継がせるつもりで、家族、三輪家、本人の同意をえて頼三郎の養育を引きうけた。頼三郎が林姓となつて、明治二年（一八九三）九月、有章の無二の親友で、東京の高橋捨六法律事務所に向かったことは既述したとおりである。

その後、有章は児玉郡長に転任するも、明治三年（一九〇〇）八月一八日、一年半で「非常に健康をそこねて」休職せざるをえなかった。<sup>(40)</sup>赴任地の本庄町から生地熊谷に「帰臥」した。このとき、日清戦争前後の埼玉県知事で、明治三〇年四月に静岡県知事に転任していた男爵千家尊福からは「回復の上は敏腕を振はりたい」と書が寄せられ、有章をして「いつもながらの懇情」で「感銘の外」ない気持にさせた。<sup>(41)</sup>

文官分限令第一一條第一項第四号による「休職」である。それは「官庁事務ノ都合」によつて必要とする規定で、満三年の休職期間が付与された。<sup>(42)</sup>在任中の職務が好意的に評価を受けたといえる。休職中は俸給の三分の一が支給された。地方高等官俸給令によれば、有章は郡長の等級が「五級」で（年俸六〇〇円）、二〇〇円が支給されたことになる。<sup>(43)</sup>

このようにして、有章は項目72のごとく明治三六年（一九〇三）八月一七日、休職の満期を迎えた。俳句を友とした有章は、自身の心象風景を捻る。<sup>(44)</sup>

芋虫のごろりごろりと早三秋

生地熊谷に帰臥して、静養につとめていた有章の姿がある。

そのころ、頼三郎は二四歳の若さで、東京地方裁判所部長判事に昇任した直後である。

有章は司法官になったばかりの頼三郎にたいして、かつて詠んだ「若竹のすんなりのびし風情かな」を思い出し、成長する姿を重ね感慨にふけていたにちがいない。<sup>(45)</sup>

休職満期の翌年九月に、有章の長女さだ（貞子）は頼三郎と結婚したからである。

## 五 林有章の社会的活動と功績

——名勝「熊谷桜」を中心に——

林有章は前章の郡吏履歴を引きつけていえば、一九〇三年八月一七日の休職満期のそれ以後について「第

四期」とも位置づけるべき、いわば余生を生地の熊谷で送った。

親友の高橋捨六からはそのころ、今度「某会社の社長」を推薦することになったので「実業界」に入ったらどうかとの勧誘を受けた。養嗣子の頼三郎も東京地方裁判所部長に昇進したので、この誘いは「幸運の第二の機会」と思ったが、健康も十分に優れなかったこともあって、有章は断った。<sup>(46)</sup>

翌〇四年（明治三七）七月、熊谷町会議員改選時では候補者に推薦されて、有章は当選してしまった。〇七年（明治四〇）の町会議員改選でも再選されたものの、今後は表面にたつことを避け、裏面にあって町の発展に「微力」をつくすことにした。<sup>(47)</sup>

そのなかで第一に特筆することがある。熊谷堤の、名勝「熊谷桜」と称えられるまでに育てあげた功績を取りあげねばならない。熊谷駅南口近くの「万平公園」に、初代埼玉県会議長をつとめた「竹井澹如翁碑」とともに、林有章が撰文の「熊谷堤栽櫻碑」が現存する。それを要約して叙述することで、名勝「熊谷桜」の由来と有章の貢献度をみておきたい。万平公園の「万平」とは竹井澹如の幼名である。

石碑上部の篆額は右から二字ずつのヨコ書きで「熊谷／堤栽／櫻碑」とある。その下、石碑の文面は末尾「神嶋石文刻」を除き、右からタテ書き全一八行分がある。採録引用にあたつて、便宜上、二行目以降の改行部先頭に「／2」のように順列の数をおいだ。最終行の一八行目は、そのままで詰めなかった。<sup>(48)</sup>

## 資料 1

熊谷堤栽櫻碑 正二位勲一等公爵西園寺公望篆額  
直實之勇武與櫻花之精英俱於熊谷爲古今雙美而直實  
事蹟炳然乎史乘荒川發源／2於秩父山至熊谷爲大河  
其陽有熊谷堤行餘邇迤遠接墨堤天正二年爲小田原北  
條／3氏所築往昔石上寺以西堤上有櫻樹曰熊谷櫻文  
化之交狂歌師三陀羅所詠我毛其／4阿彌陀笠着天咲  
花爾後者見世努熊谷櫻即是也安政六年荒川泛濫崩潰  
堤塘櫻樹／5亦遭厄忍城主松平某補植之上府後寓櫻  
咲久言傳毛奈志都鳥之句於石上寺以據／6其繼繼之  
情其後朽枯相尋逮明治維新不復留隻樹明治十六年一  
月竹井澹如高木／7彌太郎及余胥謀欲復名場求堤塘  
關係町村總代連署請埼玉縣令吉田清英三月購／8櫻  
樹於東京染井里毛利家別業植諸堤上以復舊觀而樹日



長枝年茂有堤塘危險之／9 虞矣有志憂之開町會猷金請増築於縣廳則以縣資起土木馬踏倍舊實明治三十四／10 年後明治四十三年八月有洪水更以臨時縣資新築小段於是堤塘始得安全焉先／11 是彌太郎逝澹如久寓東京余亦官遊十餘年有折花者有截枝者將歸衰減矣當是時／12 余與澹如前後歸鄉慨然講之保護法謀有志明治三十九年二月勅保勝會設委員募／13 資屢增植櫻樹二十餘丁間遂達一千樹一樹有蔽四至十間者明治四十三年四月興／14 櫻雲閣以便衆庶觀覽且充公會堂朝則秩父諸嶺送翠嵐於檐額暮則荒川清流浮帆／15 影於堤外與櫻花麗豔相映帶宛然如畫遊客沓至曳杖於春風貽蕩綺霞繡錯間追懷／16 往事說直實遺烈稱其雙美則謂海內加一名場豈不可哉而關此事委員諸氏之勞亦／17 足也頃者本會建碑欲傳其事於後世因叙其概畧如此  
大正三年一月 保勝會會頭從六位林有章撰并書

神嶋石文刻

石碑は、有章の郷里への深い自負と詩情があふれる遠近的な描写で展開する。

熊谷直實の勇武と桜花がとくにすぐれていることはともに、熊谷では、昔から今日まで美しく、直實の事

跡は明らかである。記録によると荒川は秩父山に発し、熊谷にいたって大河になる。その北岸〔左岸〕に熊谷堤がある。川は下流に長くのびてすすんでゆくと、遠くは「墨提」つまり隅田川の堤に接している。

天正二年（一五七四）、堤は小田原北條氏が築き、石上寺の西側の堤に桜樹があつた。それを「熊谷桜」といった。安政六年（一八五九）に、荒川が泛濫して堤塘の桜樹を崩潰してしまい、忍城主の松平某（忠国）はこれを補植したものの、明治維新後はふたたび、双樹しか残らないほどになつてしまつた。

六行目からは、主題に直接かわる——明治一六年（一八八三）一月、竹井澹如、高木彌太郎および林有章は相謀つて「名場」を復活させようと、堤塘の關係町村総代と連署して埼玉県令吉田清英に要請した。三月、東京柴井の毛利家から桜樹〔吉野桜〕を購入して諸堤の上に植え「旧観」に復した。樹は日に日に、枝が長くなり年々茂つて、堤塘は危険の恐れとなつた。

有志はこれを憂い、町会を開きて献金し、県庁に堤塘の増築を要請した。すなわち県の資金で、土木事業を起こし堤塘の「馬踏」は旧倍になる。明治三四年（一九〇一）のことである。明治四三年（一九〇六）



八月、洪水があった。さらに臨時県資で堤塘に「小段」を設けて、はじめて安全をえた。

彌太郎が逝き、澹如は久しく東京に住み、有章も官途として「十余年」離れていると、花を折る者や枝を切る者が桜樹を衰滅に追いやった。

一二―一三行目でいう。このとき、有章と澹如は前後して帰郷するや、憤って嘆き、桜樹の保護法を有志に謀った。明治三十九年（一九〇六）二月、保勝会を創（はじめ）め、委員を設け、資金を募集して、桜樹をしばしば増植し、ついには一〇〇〇樹に達した。一樹は四―一〇間を蔽った。

明治四十三年（一九一〇）四月に「櫻雲閣」を興した。桜を観に来た「衆庶」の便宜を図り、かつ公会堂にも充てた。朝になれば、秩父の山並みが「翠嵐」をひさしに送り、暮になると、荒川の清流は「帆影」を浮べ、堤外では桜花とともに、見目もよく光がうつりあい、ちょうど絵のようである云々と。

本会は碑を建て、この事を後世に伝えんと欲す。よって、その概略をのべた。

大正三年（一九一四）一月、保勝会会頭、従六位、林有章が撰文ならびに書を書く。

保勝会の初代会頭は竹井澹如であった。だが、明治四十三年（一九一〇）三月、竹井は辞任し、ただちに有章が全会一致で会頭に推薦された<sup>49</sup>。直後の八月七日に、竹井は永眠する。櫻雲閣は、大正一四年（一九二五）五月一三日の熊谷大火で烏有に帰した。

この「熊谷堤（桜）」は、昭和二年（一九二七）八月一日、内務省告示第四〇四号にて「史蹟名勝」として指定された。該当する地域は「鎌倉町三丁目踏切より佐谷田境」までで、桜樹の伐採ならびに異樹種の移植を厳禁するという告示であった<sup>50</sup>。

ときの内務大臣は鈴木喜三郎である。頼三郎の司法次官時代の上司であった。しかも、鈴木喜三郎は数年後に、横浜専門学校「奨学会」の顧問のひとりとして就任したことに触れておかねばならないであろう。

名勝「熊谷桜」となった発端は上記の資料1にみたように、熊谷市鎌倉町「石上寺」の西堤の桜樹であった。その観点から敷衍すれば、石上寺の境内に建立されて現存する資料2「林翁紀徳之碑」は決して不自然ではない。歴史的な存在意味がある。

石碑裏面の下段に、建立世話人は松本真平、西村徳太郎、太田重蔵、恩田彦兵衛、風間浅五郎の五名が記

され、その上には地域の一八三名の寄附者名前が刻印されている。その意味で、地域の人びとからの「厚意」で建立されたことがわかる。<sup>(31)</sup>

だが、その内容は有章の既述履歴と資料1と重複する部分も多い。しかも、かつて紹介された活字化碑文は誤字、脱字も散見される。<sup>(32)</sup> それらを訂正して採録し、従来の記述でぬけ落ちた事項「折適學社」と碑文の選者について、補足するにとどめておきたい。

資料2の碑文改行部分は斜線（／）、誤記訂正部分が傍線（　）、採録欠落部分が亀甲カッコ（　）で示す。

## 資料2

### 林翁紀徳〔之〕碑

貴族院議長正二位勲一等公爵徳川家達篆額

熊谷爲武之名邑、邑南有隄、隄上皆櫻、春風被野、千樹競英、則衣香鞭影、紛紛沓／至、拂彩雲、踏暖雪、徘徊忘歸者、每歲不下三十萬、世媿之吉野小金井、稱爲三勝、／不誣矣、而其致能然者、林翁櫻雲之力居多焉、翁名有章、字子慶、號幽嶂、櫻雲其／別號也、世家於熊谷、弱冠爲折

逆學社幹事、又參畫邑政、出仕大藏省歷任埼玉／縣北葛飾北埼玉兒玉三郡長、有廉幹之譽、敍從六位、明治三十六年、辭官歸里、／先是櫻樹年老多朽枯、勝區漸爲荒廢、翁深慨之、與同志者謀、購名種而移植之、／然摧折相繼、人以爲憾、至是與竹井澹如等議、剏保勝會、請官修堤擴路、務講保／護之法、又設樓閣、以便遊覽、翁爲櫻樹致力者、前後實三十年、現爲保勝會頭、爲／人誠篤、容恭而言溫、好學工書喜與騷人韻士遊、所作文詩歌謠、總托諸櫻、遂〔至〕／以爲別號、人因稱曰是翁之櫻耶、櫻之翁耶、蓋其〔錦繡之腸雅潔之操與櫻花有〕／所相契也、昔者林和靖愛梅、結廬孤山之下、諷詠自適、今翁愛櫻、急流勇退、角巾／野服、周旋乎名花之間、其情何異和靖、然則熊谷者其翁之孤山也歟、乃者鄉人／以其地著聞、而保勝蒙利、爲翁之德也、欲勒之貞珉、圖不朽、來索予文、予已憇翁／之風、今又嘉有此舉、因記其由、係以頌曰

花之馨兮　維國之祥　翁之德兮　維鄉之望　有屹豐碑

嘉績彰彰　蒼靈自東　隄樹騰光　勿翦勿折　永

比甘棠

大正十四年三月一日

樞密顧問官正三位勲一等法學博士平沼騏一郎撰  
宮内省御歌所日勤寄人正五位勲四等坂正臣書

石碑の篆額は貴族院議長の公爵徳川家達、石碑上部に右から三列にわたって「林翁／紀徳／之碑」とある。本文が一四行、詩文が二行、建立は一九二五年（大正一四）三月一日、撰文は樞密顧問官で法学博士の平沼騏一郎（一八六七—一九五二）である。

撰文の平沼は、頼三郎が属する司法省では上司であった。一九一一年司法次官、一二年検事総長、二一年大審院長、二三年司法大臣に挙げられて、二四年には樞密顧問官に親任された。<sup>(33)</sup>

司法省は一九〇六年（明治三九）の、第一次西園寺公望内閣の松田正久法相が就任してから「政友会の勢力が扶植」され、その色彩が濃厚であった。ことに、鈴木喜三郎と平沼騏一郎がその「中堅」となるや、いわゆる「鈴木平沼閥」を固め、その勢力を張ったものである。<sup>(34)</sup>

平沼の検事総長時代、司法省内に「刑事訴訟法改正

調査委員」が置かれ、<sup>(35)</sup> 刑事局長の頼三郎は同委員に就く。二二年五月に、刑事訴訟法改正は公布をみた。

その意味からいえば、建立の時期というのは、鈴木喜三郎法相のもとで頼三郎が司法次官に昇任した二か月後であった。

しかも、平沼や頼三郎らが前後三〇年にわたって「参与」した念願の刑事訴訟法の改正事業は両者の結びつきを強固にしたとしても不思議ではない。撰文の依頼は頼三郎が担ったと考えてよい。

平沼はのちに一九二七年（昭和二）五月二十八日、国本社の熊谷支部発会式に会長として臨場したとき、この碑文の建立地を訪れ、有章、頼三郎とともに記念撮影に納まった。<sup>(36)</sup>

ところで、碑文の四行目にある「折造學社」とは一八七七年（明治一〇）、埼玉県庁から変則中学の設立許可をえて、授業を開始した学校である。竹井澹如が上京し物色した大竹政正を先生として発足した学堂名である。<sup>(37)</sup> 有章は学社幹事として五年八か月を務めて、熊谷地域の「中等教育の中堅」を支えた。

それは、竹井を先導者として、若き有章たちが随伴したといえる。竹井は熊谷県の設置を建白して目的を

達成したばかりでなく、つとに板垣退助、後藤象二郎らと交わり、自由民権の説を唱道した。熊谷の板垣といわれたのは、このころのことである<sup>⑧</sup>。

このようにして、有章は幼少期から二〇歳近く年長の竹井澹如の許に出入りして、青年時代でも「非常な眷顧」を受けたのみならず、竹井からも深く「信頼」をえた関係である。有章の号「幽嶂」は、竹井の号「幽谷」に由縁するとも思われ、その慕う度合と関係の深さを表徴してあまりある。

碑文のなかで「翁之櫻」か「櫻之翁」かと記されている「翁」とは、竹井と有章の功績からいえば、二重写しにした意味あいで、竹井でも有章でもよいと解釈できそうである。

吉野、小金井と並びて熊谷が、日本三大桜の名所と世に称えられたのは、このふたりの主導的な尽力が大きかったといえる。

おわりに

——墓石Aと墓石Dを次号への結節点として——

林氏墓所は、門柱からみて正面にあるのが墓石A「林家累代之墓」である。その両脇を固めるのは、左

が有章夫妻の墓石、右が有章の父「由右衛門」墓石である。門柱からみて右側にあるのが墓石Dである。墓石の古さを優先すると、まず墓石Dを解説するのが順当であろう。

純忠院烈譽晃勲居士〔正面〕

〔右〕衛生上等兵 林 晃彦

〔左〕施主 林頼三郎

林晃彦は有章次女「文子」の嫁ぎ先、三田昌治の四男である。一九一四年（大正三）六月一七日生れ、頼三郎夫妻に子女がいなかったので、二〇年には頼三郎の養子となった。

病身であった長女「さだ」は熊谷の有章邸で晃彦を育て、中央大学予科に進学した。四三年（昭和一八）八月五日、出兵先の南方方面で戦病死した<sup>⑨</sup>。

だが、この墓石Dをみると、晃彦がいつ死去したかの刻印はない。異形な墓石である。

純粹で、国民の義務を忠実にはたしていた養嗣子が、戦病死というかたちで迎えきれざるをえなかった頼三郎をして、いかに無念でならなかったかを如実に



写真3 「故中央大学総長林頼三郎大学葬」

(中央大学大学史資料課所蔵)

林頼三郎の中央大学葬が1958年5月15日、大学会館で執りおこなわれ、大学から自宅に向かうところ。中央先頭から4人目で遺骨をもつのは喪主の林裕、未亡人が分骨、そのほかの遺族が位牌、遺影をもつ。

ものがたっている。

法律家としての頼三郎は複雑で、養父としては内面奥深く、戦争への義憤を抱きつつ、見彦の戦病死の日付を記したくなかったかもしれない。

最後にみるのは墓石Aである。

林家累代之墓〔正面〕

法林院殿誠温梅堂大居士 昭和三十三年五月七日逝

俗名頼三郎行年八十一才

白雲院静譽貞順大姉 昭和二十九年十二月十六日逝

俗名さだ行年七十六才

〔裏〕 昭和三十四年五月建之

施主 林 裕

林氏墓所の、いわば正面中央に位置している。古色蒼然としたその他の墓石にくらべると、ひととき目立つ墓石である。墓石の立ち位置があるとするならば、墓石Aは林氏墓所の中心的存在といえる。この位置は誰が設定したのであろうか。

養父の有章にしてみれば、養嗣子の頼三郎は累世の「二門の光榮」であつたがゆえに、中心的なその場を

設定したとしても否定することができない。

墓石正面から向かって右の側面には、頼三郎と妻「さだ」の院号と死去日が記されている。墓石の裏面は、墓石の建立日と施主名が刻まれている。

頼三郎が一九三六年（昭和一一）三月九日に、廣田弘毅内閣の司法大臣に就任した。このとき、妻のさだは「八、九年來の病身」を郷里の熊谷に療養していると報道されたものの、さだが死去したのは一九五四年（昭和二九）二月一六日である。それは、頼三郎が死去する三年前で、その間、墓石は建立されなかったことがわかる。

このように養父の林有章を中心にして検討してくると、養嗣子の頼三郎は、養父の存在と後楯を抜きにして「光榮」の人生を歩むことができなかった可能性がきわめて高いといわねばならない。

施主の「林裕」については改めて言及することにして、いくつかの不明と検討課題を抱えつつ、むすびとしたい。

## 註

(1) 拙稿「横浜専門学校の奨学会と構図」（『神奈川大学史紀要』第4号、二〇一九年三月三二日）。この要約版は拙稿「横浜専門学校と横浜の政財界——奨学会の給費生制度をめぐる——」（『神奈川大学資料編纂室編「神奈川大学人物誌 横浜専門学校編——神奈川大学創立90周年記念」、二〇一八年一〇月）である。

(2) 墓地名は神奈川大学資料編纂室の木内好信室長にお聞きして、出向く。だが、現地に疎く、地域の遠近距離も定かない。寺院名「熊谷寺」は「ユウコクジ」と読むことも知らなかった。二〇一九年四月二五日、埼玉県行田市の旧忍藩城下を歩きめぐり、熊谷市の熊谷駅で下車した。このとき、両地域が旧忍藩領域であったとは知らずに、なぜ市域がちがうかと不思議に想つての移動であったことを告白しておきたい。

(3) 林有章『幽嶂閑話』林有章（私家版）、一九三五年、二五四、二五九、四〇七頁。

(4) 同右、四〇八頁。

(5) 林義男、春枝ご夫妻の談話（二〇一九年九月七日）。

(6) 林義男氏所蔵文書。

(7) 熊谷市文化財一覧（熊谷デジタルミュージアム）による。二〇一九年末の文化財一覧によれば、国指定が八件、県指定が四一件、市指定は二四六件が登録されている。竹井澹如が一七世紀前半期の元和年間からあった池を名園に育てあ

げた「星溪園」は、一九五四年の文化の日に熊谷市指定史跡の認定を受けた。

- (8) 前掲『幽嶂閑話』、二六〇頁。この建物は一九二四年五月一日、災にあつて烏有に帰した。

- (9) 同右、五四七～五四八頁。当時、鎌倉町の自宅庭に「百碑記念林有章翁壽像」を贈られた。

- (10) 同右、四六九頁。有章は「相続人」に〈あととり〉とルビをつけている。

- (11) 同右、五二六頁。

- (12) 大沢俊吉『林頼三郎伝』埼玉県立文化会館、一九五九年、八八頁。この伝記は、埼玉県「郷土の青少年の向上に少しでも役に立ちたいと願」つて出版されたがゆえに（二二四頁）、頼三郎の「頼」は当用漢字「頼」に直されたと考えてよい。著者は、頼三郎と「私の祖母の親類」にあたつていたとはいえ（はじめに）、潤色をさけた叙述がきわだち信頼がおける。この県立文化会館版が五九年三月二〇日に発行されるや、東京の「偉人伝文庫」を出版するポプラ社は五九年五月一〇日付で、同版型を使つたと思われる『林頼三郎伝』を出版した。印刷所は、両作品とも東京の神田三崎町「須藤印刷株式会社」で、本文の頁数も同じである。

- (13) 前掲『幽嶂閑話』、三七六頁。

- (14) 同右、五五三頁にも、同様の記述がある。

- (15) 「故林総長履歴」（『中央大学学報』第二一卷第四号、一九

五八年七月、六四～六七頁）。以下の叙述では頼三郎の履歴にふれるとき、これによる。

法学博士会は二〇年三月二七日、推薦候補者六八名にたいする投票に移り一一名が当選した。末廣巖太郎、二上平治、江木翼、鈴木英太郎、松田道一、林頼三郎（主論文「予備罪と中止犯との關係を論ず」、馬場鉄一、飯島喬兵、和仁貞吉、堀江專一郎、岩田一郎である（『読売新聞』一九二〇年三月二八日、五面）。

- (16) 前掲『幽嶂閑話』、四七四頁。

- (17) 『読売新聞』一九二七年四月二七日、七面（東京市内版）。

- (18) 『東京朝日新聞』一九三六年三月一七日、四面、読点は引用者がくわえた。

- (19) 同右、読点は原文。

- (20) 前掲『幽嶂閑話』、五五四頁。

- (21) 同右、五五五頁。

- (22) 資料「元郡吏履歴」七ノ十四（埼玉県行政文書／明1935—31、埼玉県立文書館所蔵文書）による。

- (23) 前掲『幽嶂閑話』、四九二頁。

- (24) 資料「郡長試験関係書類」（明965、埼玉県立文書館所蔵文書）。

- (25) 『法令全書』明治二十年省令、内務省省令第五号、明治二〇年一二月二九日「郡区長試験条規」第二条、二二九頁。

- (26) 投書記事は未見、前掲『幽嶂閑話』、四九四頁。

- (27) 前掲『幽嶂閑話』、四九四～四九五頁。



- (28) 前掲「郡長試験関係書類」。
- (29) 前掲『幽嶂閑話』、四九三～四九四頁。
- (30) 同右、四九五～四九七頁。
- (31) 同右、五二六～五二七頁。
- (32) 同右、五〇二～五〇三頁。
- (33) 同右、五〇四頁。郡区長試験科目は「就職スヘキ地方ノ風土慣例及物産」「郡区長職務ニ必要ナル法令」「郡区長職務ニ関スル公文ノ立案」の三点で（前掲『法令全書』明治二十年省令、第一条、一二九頁）、有章にとつて郷里の埼玉県と大蔵省での経験と知見を十分に生かすことができたと思われる。
- (34) 前掲「郡長試験関係書類」。郡区長試験は、筆記と口述の二様であった。試験は「受験人ノ果シテ郡区長職務ニ必要ナル法律命令ヲ実務ニ応用シ及之ヲ口述スルニ確實敏捷ナルヤ否ヲ試験スルヲ以テ目的トシ兼テ其言語動作適正ナルヤ否ヤヲ考察スルモノトス」とある（同右）。
- 試験委員長は内務次官の芳川顯正で、試験委員が渡邊國武、末松謙澄らであった。
- (35) 『官報』第一六〇一号、明治二十一年一〇月二九日、二九六頁。
- (36) 同右、第一九四〇号、明治二十二年二月一四日、一四九頁。阪本與惣次郎は前任の天野三郎に代わり、北埼玉郡長に任じられた。
- (37) 前掲『幽嶂閑話』、五一四頁。

- (38) 前掲『林頼三郎伝』、六三、六九頁。
- (39) 前掲『幽嶂閑話』、五二六頁。
- (40) 同右、五三九頁。
- (41) 同右。日清戦争後も、埼玉県庁関係者は従軍者家族賑恤として寄附金を出しあつた。千福知事が寄附最高額の一二円五〇銭で、北埼玉郡長であつた林有章が八〇銭であつたことを知るならば（資料「褒章（27・28年事件各省往復）」明1934-1、埼玉県立文書館所蔵文書）、知事と郡長との身分的待遇のちがいは大きい。
- だが、ふたりのやりとりをみると、当時の千福知事と林有章郡長との関係が緊密で信頼関係が醸成されていたことがわかる。
- (42) 『法令全書』明治三十三年三月「勅令第六十二号」、七二～七三頁。
- (43) 『法令全書』明治三十三年三月「勅令第九十三号」、一一二頁。
- (44) 前掲『幽嶂閑話』、五四〇頁。
- (45) 同右、五二九頁。
- (46) 前掲『幽嶂閑話』、五四一頁。引用中「第二の機会」には強調点がある。
- (47) 同右、五四二頁。
- (48) 林有章『名勝熊谷櫻』西村徳太郎（非売品）、一九二八年、四五～四六頁には、この碑文の刻印文が掲載されている。だが、この刻印文には誤字、脱落字がある。あえて全文を

採録して収載した。

(49) 同右、四三頁。

(50) 同右、八四～八五頁。

(51) 前掲『幽嶂閑話』、五四九頁。寄附者の人数は片倉製糸紡績株式会社石原製糸所をはじめ、わたくしが数えた数値である。

(52) 同右、五五〇～五五二頁。

(53) 『人事興信録』昭和三年版、人事興信所、ヒ四四頁、岩崎榮『平沼騏一郎傳』偕成社、一九三九年、二九三頁。

(54) 『東京朝日新聞』市内版、一九二五年八月一日、二面。

(55) 平沼騏一郎『新刑事訴訟法要論』日本大学、一九二二年、自叙四頁。

(56) 『国本新聞』一九二七年六月一〇日一面〔支部設立記事〕、同六月二〇日一面〔記念写真撮影〕。この熊谷支部が設立されるにあたって、頼三郎は「専ら奔走」して、五月五日に国本社を訪問し「打合せ」をした（同右、二七年五月一〇日、一面）。

この動きをみると、平沼騏一郎と頼三郎との密接な関係性が浮上する。その時期は、頼三郎が司法次官を外されて左遷の憂き目をみた直後のことであったことに注意を払っておかねばならない。

国本社は「日本のファツシズムの代表的なもの」とみられていた（前掲『平沼騏一郎傳』、二八〇～二八一頁）。平沼は無理に押され会長となった。

だが、その立脚点は「現今政治家と称する一部の人士は、醜陋なる政争に没頭して、殆んど寢食を忘るゝの觀がある。（中略）自覚一番して斯の如き紛争の圈外に超出し、公正なる立場から彼等の行動を監視批判し、我立憲政治の妙論を發揮し、以て輔翼の実を挙げべきである」との考えを内包していた（平沼騏一郎「政治の常道」『国本』第七卷一号、一九二七年一月、五頁）。

司法省では国本社の幹部としては鈴木喜三郎（理事）、小山松吉（理事）、小原直（理事）、林頼三郎（評議員）が名を連ねていたことにも注意をむける必要がある。

(57) 前掲『幽嶂閑話』、二三五頁。

(58) 同右、四三三頁。

(59) 同右、四三六頁。

(60) 前掲『林頼三郎傳』、二二七頁。

(61) 『東京朝日新聞』一九三六年三月一〇日、二面。

#### 〔付記〕

本稿の調査段階でお世話になったのは、一九〇六年創業の野口石材店の野口孝氏、有章が村社から県社に格上げするのに尽力した高城神社の福井千秋宮司、ご遺族の林義男、春枝ご夫妻、林頼之氏である。記してお礼を申しあげたい。

写真資料では中央大学大学史資料課、編集では神奈川大学資料編纂室の諸氏にお世話になった。